
私が私であるために

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が私であるために

【Nコード】

N8011H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

突然、まさにこの小説のためにある言葉である。突然こんなことが起こったらあなたならどうする、こうする、やっちゃう。とさまざまな観点があるなか、この男はこういった行動をとる。はたしてこの男のとした行動とは。さあ、今からREADしようぜ！

プロローグ

プロローグ

大雨の日の出来事、それは唐突に閃いたかが始まりだった。

「これしかないわ、うんこれしかない」

少女の声が部屋に響いていた。

回りから見ればいったい何事なんだろうと思えるぐらいの音量であった。

君ならどう思うであろうか、少女について。どんな少女であるのか、はたまた、頭のねじが外れているのであるのか。この少女はいったい何を思いついたのあろうか。

「はい、みなさん聞いて。というか聞け。」

この大きな声に振り向かない奴はいないだろう、例え、ヘッドホンを付けていても耳に入ってくるくらいだ。これが聞けないという奴は死んでいる人くらいであろう。

「今からここにいる皆さんにクジを引いてもらいます。一枚だけ当たりが入っています。当たった人は私と結婚してもらいます」

はぁー、クラス中が騒ぎ始めた、もちろん俺も少女の言葉に啞然としていた。おっとそういえばここがどこか話していなかった。

ここは大学の講義の部屋である。ちょうど授業が終わって帰る準備をしていたところにセーラー服をきた少女が入ってきたんだ。

で教卓にたち先ほどの発言をしていたんだ。

皆ががやがやしているのを尻目に教室を出ようとしたとき、またもや大きな声が聞こえた。

「ちよっと、そのあんた。何かってに帰ろうとしてるのよ」

たぶん、俺に言っているのであろうが俺は気にせず席を立った。

「ちよっと聞いているの、人の話は最後まで聞きなさいとお母さんにならわなかったの」

少女が俺の前に立ちふさがった。

「……………」

俺はどけよと最後まで言葉を発する前にくじ引きの箱を突きつけられた。

「引きなさいよ。ほら」

俺の顔にねじり込むように箱を突きつけていた。なんて女だ。

俺は文句の一言でもいようとしたが、何か言い返したらめんどくさいことになりそうなので素直にくじ引きを引いた。そしてさっさと帰ろうと思っていた。

俺は、少女が持っているくじ引きを引いた。そして、くじ引きを少女に渡しさっさと教室を出ようとした。

「ほらよ、これでいいだろう。じゃあな」

少女はしばし、といってもほんの、2、3秒止まっていた。

俺はその隙に教室から出ようとしたが、誰かに服を引っ張られていた。

「誰だ」

俺は振り返ると少女が俺の服を掴んでいた。

「……な」

「大当たり、おめでとう」

俺が言葉を発する前に少女が叫び俺に抱きついていった。

「今日からあなたは私の夫に決定しました」

「……………」

俺は言葉を失っていた。この日を境目に俺の人生が大きく動き出した。

第1話 結婚、それは人生の墓場

「おめでとう」

「幸せにね」

「ブーケ投げて!!」

など、祝福の言葉が遂げられる。

「ありがとう、みんな、私幸せになるからね」
今、話しているのが俺の奥さんである。

俺は奥さんの顔を見た。

奥さんはニコって微笑み笑顔で返してくれた。

うっ、可愛いと俺のハートがびびっと震えていた。

いや、まて、俺どうしてこうなったんだ。落ち着け、冷静に考えるんだ。

だいたい、俺学生だよな。学生結婚って。あーどうしてこうなったのかなあ。

俺はよく思い出してみた。

「ここはどこだ」

俺は彼女に連れられてどこぞのマンションの部屋にいる。

「ここが私たちの家よ」

あーそうかい、ってえっ!!

「私の間違いでは」

俺はおそろおそろきいた。

「なにいつてるのよ。あんたバツカ。日本語理解できるの」
できますよ。日常会話の日本語ぐらいね。なんてったって、日本人ですから。

「失礼な。だいたい貴様は誰で、なんで俺につきまとう」

どうだ、俺も男だで、さんずいの方の男だぜ、じつはこれはかん（漢）と読むのだがな。そんなことは今はどうでもいい。ふん、高校生の分際で人様をバカにするとは。これだけ強く言えばこの高校生の少女もこりるだろう。ふふふ、どうよって言う顔で少女を見た。するとどうだろう。少女は顔を下に俯いた。

「えっ、あ」

俺はあれ、強く言いすぎてしまったのか、と罪悪感がつのったので謝ろうと思った。

「い、・・・」

「ふふふふふふ」

少女は突然笑い出した。

俺はキョトンとしていたが、少女は気にもせず俺の方を指を指し話し出した。

「あなたは、私の夫よ。それ以上でも以下でもないわ。それが理由よ。何か文句でもあるわけ」

ありますよ、あるにきまつてるだろう。

「ある・・・」

「まあいいわ。あなたの名前は、さあ、名を名乗れー」

あんたどこぞの將軍様かと思いたくなる台詞であった。っていうか俺の話を最後まで話させろ。

何が名を名乗れだ。まずは自分の名前をいえって。俺の心が読めたのであろうか。少女は名乗り始めた。

「そうねえ、やっぱ、こういうのは先に名のならいとね。私の名前は、平等院

^{はじめ}肇よ。肇って読んでくれてかまわないわ。私の夫だから。であなたの名前は何」

「ああ、俺の名前は睦月 ^{はじめ}一だ。って同じ名前かよ」
まさか、同じ名前だとは。少女の方を見てみるとなにやらぶつくさ考えていた。

「なるほど、じゃあ、平等院 一ね」

「って俺が婿養子決定かよ。っていう・・・」

少女に口を抑えられた。少女は携帯電話を取り出し、どこかに掛けていた。

「うん、そうそう、じゃあ、さっそくとりかかって頂戴」

いったい、何を話しているんだ。少女は電話が終わると俺の口から手をどけた。

「もういい、俺は我慢ならんぞ、だいたい、俺は貴様とは結婚もしない。じゃあな。俺は自分のアパートに帰る」

「ちょっと、待ちなさいって」

俺は少女の言葉など無視して自分のアパートに帰っていった。全く、今日はついてないぜ、さっさと家に帰ってシャワー浴びて寝よう。と考え家に帰宅してみると、そこはもぬけの空だった。

「えーーーーー」

俺は思わず声に出してしまった。いったん、外を確認した。部屋の番号も確認した。ここだ。確かにここは俺の部屋だった。ありえない、まさか、泥棒でも入ったのか。って家具全部盗むか、TVも、俺の大切なプラモさえもない。

俺は力尽きて倒れようと思ったが、ある一つの考えが浮かんできた。いや、まさかありえない。というか信じたくない。信じるものか。でも、まさか。

俺は少女のマンションにむかった。風のように。そして少女の部屋にたどりついた。

「はあはあ、おい」

「あっおかえり、荷物届いているよ。」

俺の考えたくもなかった予想が的中した。

「もう、突然いなくなるんだもの心配したぞ。このお」

少女は俺の頭に人差し指でつついた。俺は、もうおもいつきりひでぶーーーーて叫びたかったがそのような気力も体力もなくその場に倒れた。

「え、ええー」

第二話 川の流れるように（前書き）

目を覚ました男、目の前には見慣れない光景、いったいここはどこなんだ。私はだあれ、私は私だろって突っ込みをいれつつも現状を冷静に把握する。いったいこの後どうなるんだ？ 気になる続きはREADすれば分かる。そうとわかれば今日もREADするんだ。

第二話 川の流れるように

第2話 川の流れるように

俺は目を覚ました。

「うーん。なんだいいにおいがする」

頭がまだぼけーっとしていたが、俺はにおいの方へむかった。

「おっ、起きた。夕食もうできるから、顔を洗ってきなさい」

「うん、母さん分かったよ」

俺は言われるがまま顔を洗いに行った。

バシャバシャ

「あー冷たくて気持ちが良い。う、うん？母さん？」

俺はふと思い出したように顔もぬれたまま先の場所に戻った。

「うん、はじめちゃんどうしたの？あっタオルなら洗面所の後ろにあるのどれでもつかってくれていいよ」

「そりゃどうも、ってそうじゃねーよ。お、俺のアパート、へへっ

へ部屋の荷物もが、ああえええっと」

そのときはじめ（女）は水を差しだした。

「ほら、落ち着いてこれを飲んで。マイナスイオンよ」

俺は水を受け取り飲んだ。

「ごくっ、いやーやっぱマイナスイオン水はおいしいねってそうじゃねーよ。いったいがつたいどういうつもりだよ。俺の許可なくかってに引っ越して」

「許可ならあるよ」

平等院は電話を掛けていた。

「あつもしもし、平等院です。あつちよつと変わりますね。はい」

「誰だよ。いったい」

俺は電話を受け取った。こいつの両親か？がつんといってやる。

「はい、変わりました。どちらさんですか？」

「もしもし、はじめちゃん!？」

んっ俺はふとその聞き覚えのある声、あっ母さんだ。

「か、母さん? なぜ、えっえっ!？」

そのとき、平等院はまたもマイナスイオン水を差し出した。

「はい」

「・・・・・・・・・・」

俺は無言で受け取り水を飲み干した。

そしたらまた、平等院は水を差しだしてきた。

「はい」

「・・・・・・・・・・」

俺もまた無言で受け取り飲み干した。

「はい」

「・・・・・・・・・・」

この一連の動作が6回ぐらい繰り返したところで俺は諦めた。

「もういいです。ありがとうございます」

「いえいえ」

平等院は笑顔であった。

とりあえず俺は電話の方に戻った。

「もしもし、はじめちゃんどうしたの？」

「いや、なんでもねーよ。それよりいったいどういう事だよ」

「あ、そうそう、聞いたわよ。結婚おめでとう。式はいつかしら? 母さん楽しみ」

「はあ、なにいつてんだよ。母さん。それより母さんがかってに引越しの許可だったって」

「もう、照れなくて良いのに、おそかれはやかれ同せいするんだから。それにアパートの家賃を払っているのは母さん達なんだからね」
「ぐっ」

それを言われると辛い。正直バイトだけでは生活するのがやっとならな。

「それはそれとして、まだ俺学生だよ。結婚とかまだはやすぎるよ」

俺は言ってやった。だいたい職もない学生が結婚しても、食っていきけるはずがない。

「何言ってるの？18才超えたら結婚できるのよ。あんた、これを逃したら二度と結婚できないわよ。それでもいいの」
なんて親だ。そこまでいいですか。息子に対して。

「だいたい、俺、結婚費用払えるぐらいの貯金もないし。こいつも高校生だぞ」

「あらそれなら心配いらないわ。むこうさんがすべて手配してくれるって。ああーはやく孫の顔がみたいわ」
母さんはトリップしていた。

「まさか、母さん。買収されたんじゃ」

俺は感づいたね。おかしいじゃないか。絶対おかしい。すべてがおかしい。

「ぎくつ、な、ななにを根拠にもう用事がないなら切るわよ。かわいい奥さんによろしくいってね。がちや」
つー。ツー、ツー。

「あっ、おい。ま・・・」

電話が切れた。

「ね、分かったでしょう。ちゃんと両親の許可はもらっているんだから」

「・・・」

俺はこいつが一体何者なんだとか、ここしか暮らすことないぞとか、あーもう頭の中がいっぱいになっていた。

俺と彼女との暮らしが突入していた。

「はじめちゃん、星座は」

平等院が聞いてきた。

「えっ、正座！！ああ」

なんなんだ、いったいこの女は何をたくらんでいるんだ。あ、あれ

か確かにこの家の家主はこいつだ、と思いとりあえず正座をしていた。

「これでいいのか？」

「ははは、はじめちゃんそれは正座だよ。私が聞いているのは☆の正座のことだよ」

なんていうことだ、この女、正座と星座を掛けるとはなかなかやるな。ここは気の利いた答えをいってやらないと。

「モナリザかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ、ここで大爆笑がおこるはずなんだけど。平等院の顔は目が点になっていた。じゃあこっちはどうだ。

「ほ、本当は便座」

「・・・・あはは、おいそうだね」

く、苦笑だと。平等院の目が哀れみの目であった。おもしろいとおもったのにな、自分では壺にきたかと。たえられない、たえられなかった俺は素直に答えた。

「すいません双子座です」

「えへへへ、私もだよ」

あーそうですか、そりゃよかざんすね。最初から普通に答えたらよかったよ。

「あっコーヒー飲む」

「ああ、頼むよ」

「じゃあ、待っててね」

平等院はコーヒーを入れに台所にいった。

その間に俺はへんぴつなことを考えていた。

「さあ、今夜ボクシングの世界王者タイソンに挑戦するあほは、ボクシング理論を考えた学者ヒーラーノです。それでは試合開始。カーン」

はちきれそうな筋肉質の体をしているチャンピオンと白い科学服を着た貧相な体のヒーラーノが立ち向かっていた。

試合が始まると共にヒーラーノが話し出した。

「偉大なスポーツほど科学を必要とします、科学がトレーニングに勝つことを証明しましょう。へぶし」

タイソンのパンチがみぞおちに入った。ヒーラーノはダウンした。

「1, 2, 3, 4, 5」

ヒーラーノは腹を抱えながら、立ち上がった。

「今のは悪い例です。パンチが着たときは45度の方角にさばい、ぐはぁ」

またもタイソンのパンチがボディに入りダウンした。

「1, 2, 3, 4, 5 6 7 8 9。10。タイソンの勝ち」

「ヒーラーノ」

誰かが俺に声を掛けていた。

「ねえねえ、ねえってば」

「はっ。な、なに」

俺はそのこえによって妄想ワールドから現実世界に戻ってきた。

「はいコーヒー。砂糖は2つでいいよね」

「ああ」

俺は平等院からコーヒーを頂いた。

「ねえねえ」

「うん、何」

「ヒーラーノって何。さっき声に出てたよ。はぁ、もしかして女？」

「違うよ。ボクシング理論を説いた科学者だ」

「へー。物知りなんだね」

「・・・まあな。ああ、このコーヒーおいしいね」

「でしょ。ブルマンだよ。おかわりいる？いるよね」

平等院の顔がうれしそうだったのでおかわりをした。

「ああ、頼むよ」

「うん、待ってるよ」

その後、14回コーヒーのお代わりを頼むはめになった。

第三話 寿司食いねえ！(前書き)

そうそう、結婚生活も何年も過ぎると色々な事件が起こります。そんななか、あの男が現れた。この話を聞いたら寿司を食べたくなるんだなあ。さあ、お寿司を用意してこの話を読むんだべ。レッツ READING。

第三話 寿司食いねえ！

肇との結婚生活も半年以上過ぎていたら色々と事件が起こった。

「あーあ、まさか病院に入院するとは思わなかった」

その時、医者が入ってきた。

「やあ、睦月いや平等院一さお元気そうで」

「はは、お世話になります」

「平等院さんもよく入院しますねえ」

「ははは・・・」

一はにが笑いをしていた。そう、なぜなら今年に入って6回目の入院であるからであるから。先週も入院していた。

「またですか？またカーマ・スートラを試したんですか。あれほどいったでしょう61ページ以降はあんたみたいな体の硬い人間には無理だと。しかもあんな女性と・・・毎晩毎晩お盛んですな」

医者は頭に血が上っていた。

一は思ったほっとけよ。もうここの病院には二度とこないと。

「この変態PLAY好きが恥を知れ」

「・・・」

一は思ったこの医者をどこかに連れて行ってくれ。

「では他に仕事がありますので失礼しますよ。奥さんによろしこといっというて下さい。私のは金属バット並の堅さと2ボールはあなたのためにいつでもDHで待機していると」

ドアにむかい手を挙げながら歩いていった。

一は思った二度とこの病院にこないと・・・心に誓った。しばらくぼーっとしていたら父親が見舞いに来た。

「やあー元気かい。はじめ」

「父さん、んっということは母さんもきてるのか？」

一は父親に尋ねた。

「ああ、きてるが肇さんと昼食をとりに行ったよ」

「そうか。それはそれは、でわざわざお見舞いに」

「いや、何少しお前と話がしたいと思っていたからの」

父さんは真剣な顔をしていた。

「知っているかい？和歌山と岡山は違うよ」

「はあ？何いってんだよ父さん。そんなの当たり前だろ？」

「父さんは知らなかったんだよ」

父さんの目には涙が流れていた。

「・・・まさか、間違えた事でもあるのかい？」

「Y O、Y O、Y O。あるY O」

「なんでレゲエなんだよ？」

父さんは一にむかって指をさした。

「最近Y O、はまったんだY O」

「そうかY Oっていや、普通に話して、あと指を指すな」

「わかった、実はなあれはそう、10年前のことだった」

一は思った、変わるのはやっ。

父さんはコーヒーをちびちび飲みながら話し出した。

「大丈夫だって、今回は間違えないよ」

「そう、前あなた東京の日本橋と大阪の日本橋間違ったじゃない」

「ははは、そんなこともあったね」

「ちょ、ちよっと待って、間違わないでしょう。普通間違わないでしょ」

一は思わず口をはさんだ。

「こらこら、人の話は最後まで聞きなさいと親にならわなかったのか、全く親の顔が見てみたいよ。けしからん」

一は鏡を父さんにむけた。

「おらよ、これが親の顔です。とくと見てくれ」

「うーん、マンダムって感じかな」

一は思ったなんだよそれ。

「まあいい、話を続けるぞ」

一の父さんが突然叫びだした。

「そうでーす、私が一の父でーす。ごめんなさーい、アイムソーリー。父総理」

一は突然の出来事にキョトンとしていた。

「・・・父さん？入院しとく」

「いっとくー」

ハイテンションの父親はのってきた。

「っていうのは冗談で、話の続きをするか」

突如、真面目になった父である。一は首をがくつとしていた。

「ああ、どこまで話したかな、うーんそうそう。牛って年で牛乳の味が違うってところかな」

「いや、全然違うよ。それちよつとした豆知識だけど。いやいまはテレビアというのかな」

一は髪をフサつとあげていた。

「なにー、なんかかっこいいニュアンス、テレビア、じゃあ俺これからアビトレって言おう」

「逆さまにいったただけだろ、ところで父さん。父さんってこんなキヤラだったけ？」

「そんなこったーどうでもいいよ息子よ。いやマイケルよ」

父さんは一の方をぽんと叩いた。

「一だよ。は、じ、め。まちがえるなよ。息子の名前を」

今度はウインクをした。

「冗談だよ、ジョウーダン」

「・・・・・・帰れ」

さすがの俺も頭に來ていた。血が、DNAが無限増殖し限界を超えようとしていた。さすがにその様子にさっしたのか父さんは話の続きを話し出した。

「ごはん、ああーそう、日本橋とにっぽんばしの違いの話だ」

「聞きたくねーよ」

「よし、寿司食いに行くか、息子よ」

「そうだね。行こうか」

「もちろん、この父のおごりだ」

「おお、さすが父さん、じゃあ行こうか回らない寿司屋に」

僕が寿司屋に行こうと歩き出したら、父親も歩き出し、僕を追い越して振り向いた。

「息子よ、行くのは全皿100円の回る荒寿司っていう店だよ」

なんともさわやかな顔で僕を見ていた。

「……そうか」

二人は回る寿司全皿100円の荒寿司に歩き出した。

そして寿司屋につきテーブル席に座った。

「さあて、一よ。腹一杯食べるんだぞ。何にする」

「そうだなあ」

僕は回ってくる寿司を吟味していた。

「最初が肝心なんだ。わかるかい一よ」

「へーそうなんだ。あつ、中トロがあるじゃん。中トロにしよう」

僕が、お皿に一つだけある中トロを取った。

そして父さんはかっぱまきを取っていた。

そして、僕が中トロを食べようとした瞬間の出来事であった。

「ばっきやろう、てやんでえ！」

父さんが突然江戸っ子口調でどなりだした。

え、僕は突然の出来事に動きが止まってしまった。そう、まるで蛇に睨まれたカエルの如く、いや後ろから銃を突きつけられた人みたいだった。

「な、なんだよ、いきなり。父さん？」

僕はおそるおそる聞いた。

「てやんでえ、べらばーに僕は悲しいぜ、知っているのか！息子よ」
「な、何を」

僕は思った、いきなり知っているのかと聞かれても、主語と述語がないので分かりませんよ父さん。文法にそって話してよ！！と思っていた。

「マグロっていうのはな、まぐろっていうのはな、あぶらたっぷり

で、舌の中でとろけてしまう、あれ、口に入った瞬間消えちゃった。これってマジック！！手品！！と思うほどすごいものなんだが、最近、海が汚れて、化学物質、ゴミなどがいじり混じっている。その中で育ってしまったマグロはな、化学物質がお腹に溜まっているんだぞ。そしてその部分がトロなんだ。そうマグロの脂身なんだよ。危ないんだよ、危険なんだよ。毒を口にするのか息子よ。お前はな、まだ若いし、結婚もしている。これから20年30年40年と仕事をしてこれからの日本をいや世界いや地球の未来を支えていかないといけない、他にも嫁さんの肇さんと末永く暮らしていくんだ。そして赤ちゃんができたときに、おつと息子よ。赤ちゃんはコウノトリが運んでくるんじゃないよ。人から出てくるの女性のね。まあ出来たときに元気な姿で会いたいだろう。だから、お前はこれのいい、みずみずしいカップ卷きを食べるんだ。体にいいからね。父さんは笑顔で僕を見ていた。

「と、父さん」

僕は心の中で感動していた。涙が溢れそうでした。ここまで息子のことを思ってくれていたとは。父さんありがとう。

「しかし、父さんはもうこの先もう短い、ここは父さんが犠牲となって中トロを食ってやるよ。」

そういうなり、カップ卷きと中トロの皿を取り替え中トロを口の中に入れた。

「うん、上手い。まさに海の中の王様、うまいうますぎるぞ。さすが中トロ、おつともう2つ3つ注文しないと。ほらお前もカップ卷き食え。どんどんたべなさい。」

「……うん。」

僕はなんか、上手いことごまかされている気がしていた。

そしてカップ卷きを食べ終わって、いくらを頼もうとした瞬間の出来事であった。

「すいませーん、いくら巻きくださいーい」

その瞬間の出来事であった。

「ばっきやろう、てやんでえ！いくらって言うのはな・・・」
この日僕はカップ巻きしか食べなかった。父さんはいくら、うに、
トロ、赤貝、キングサーモンと豪勢であった。明日は晴れると良い
な。

第四話　なら私も食べる（前書き）

そりゃないでー、あの男といったのに、私とはいけないの。いやいやいきますよ。まじ、ちょ、うれしい。ってか、どうしたんですか？その言葉づかい。いや、別にたまにはね、こういうのいいんじゃない。ありっていえばありがたが、なしっていれば果物だね。

・・・・・・・・・・・・・・・・

話を戻しまして、こういう寿司屋ってあったら一度は行ってみたいと思うようにREADING。

第四話　なら私も食べる

肇と食事

「よし、一ちゃんの話聞いていたら、お寿司食べたくなっちゃったよ！」

「それじゃあ、行こうか！！」

「うん！ラララー」

肇は新しく傘を新調して、雨が降って喜んでいる子供のようであった。

だが僕も心がうきうきであった。

「で、どこいくの！」

肇が僕の肩に手をかけ後ろからひよこっとな顔を出した。

む、むねが、とヘブン、ヘーブンとぼーっとしてしまうのを我慢し、新聞の広告を見た。ちょうど、上手い具合に新店の機械お寿司や三丁、あなたの運を試してみませんか！？というのを見つけた。

「おっ、ここにしようか」

「どこでもいいよ」

肇は僕の背中に乗っかりながらいつていた。

「OK！じゃあ、携帯で予約しとくね」

僕は携帯で予約した。

「それじゃあ、ぼちぼちと出かけますか？肇」

「うん。それじゃあ、このまま行きますか」

「いや、それはちょっと・・・」

「もう、一ちゃんは体力ないな。仕方ない私の部屋までお願いね。お馬ちゃん」

「ヒヒーン」

僕は馬の声を上げながら肇の部屋に送っていった。

そして、僕と肇は出かける準備をして寿司屋にむかった。

「ここか、じゃあ、はいろうか」

「うん」

僕と肇は寿司やに入った。

「いらっしゃいませ」

生気のない声が聞こえた。

ロボットだった。

「わぁーかわいい」

肇はロボットに喜んでいた。

姿はゴミバケツを逆さまにしているようだ。

ロボットが席まで案内してくれた。

「ありがと!!」

肇はロボットの頭をなでていた。

ロボットはお腹にある液晶にTHANK YOU!!と文字を出していた。

僕もロボットの頭に触ろうとしたら、液晶に文字が出てきた。

「FUCK YOU!!」

「なっ!!、は、肇!! 見て見て、このロボット!!」

「うん、何を」

「文字。文字」

「う、LOVEだって。一ちゃんもてだねー」

僕はすぐさま振り向いたらそこにはLOVEとかわいらしいFON Tでかかれてあった。

心の中で。こ。こいつスクラップにしてやりてえと叫んでいた。

「さあて、食べるぞ!メニューメニュー」

肇はメニューを見て、何かを発見したものだ。

「一ちゃん、一ちゃん。これこれ見て」

「んっ!!」

肇が指し手いるところを見ると、あなたの運を試す絶好の機会、機械です(笑)! 機械に注文すると、あら不思議、トロが中トロ、大トロにレベルアップします(値段はトロのお値段で)。他にも色

々特典あり、あなたも試してみようUP、DOWN寿司に!!と書いてある。

「一ちゃん」

「肇!」

「こりゃやるきやないねー」

二人の声がかぶった。

「よしではさっそく注文するね一ちゃん!」

「おう、どんどんいこうぜ」

「では、このマイクに言ったら良いんだね」
肇はマイクにむかって言った。

「トロ一丁」

するとロボットが三体出てきて話し出した。

「トロ一丁!」

「中トロ一丁!」

「大トロ一丁!」

最初に出てきたロボットとは真逆で江戸っ子で元気の良い声とともに大トロが机の上に置かれた。

「きゃあー、やったね」

「すげー」

「ほら、一ちゃんもやってやって」

「おう、それじゃあ俺もトロ一丁」
マイクにむかっていった。

「ヘイ、トロ一丁」

「中トロ一丁」

「ガリ一丁」

なんと机の上にガリが出てきた。

「なんだこれはー」

思わず叫ばずにはいられなくなった。だってトロを頼んだのにガリが出てきたからね。

「一ちゃん、アンラッキー!!」

「なーに、次があるって。じゃあウニ一丁」

僕はマイクにむかって言った。

「ウニ一丁」

「ウニ二丁」

おっ僕の心が高鳴ってきた。

「ガリ一丁」

ガリーーン、またガリですか！俺ってガリーガリ君ガリーガリー君ですか。

「一ちゃん・・・」

肇がかわいそうな目でこちらを見ていた。

僕は肇の目を見て、これはいけない彼女に心配させてはだめだ。ここは男らしく行こう。

「うーん、このガリは一級品だね。おいしいよ」

ガリをがりがり食べた。

「ほら、肇もどんどん頼んで！？」

「うん、それじゃあ、サーモン一丁」

機械にむかって言った。

「サーモン一丁」

「サーモン二丁」

「キングサーモン一丁」

なんとサーモンがキングサーモンに変化していた。

「やったよ、一ちゃん。サーモンとサーモンでキングサーモンにだよ」

「おーすごいじゃん、んっ」

そのとき僕の脳裏に衝撃が走った。

もしかして、ガリから頼んだらいいのでは。最低なら最高になるしかない。これはいける。いけるぞ。俺はそう思った瞬間注文した。

「ガリ一丁おねげえしまーす」

「ガリ一丁」

「ウナギ一丁」

おお、これはまさか、大成功か！？？

「ワサビ大盛り一丁」

な、なにー、ワサビだどー。まだ下があったのか……

僕は落ち込んだ。そのときであった。

「はい、はじめちゃん、あーん」

肇がキングサーモンを手で掴み僕の口にいれようとしてくれた。

「あーん」

「おいしい！？一ちゃん」

「うん、おいしいよ」

僕の目からミネラルウォーターがあふれていた。

幸せでいっぱいになった。

やはり好きな人と一緒にいるということは良いことだ。今日はそれが心にしみった。わさびだけに。

第5話 たまにはね（前書き）

たまにたまにっていうけど頻度はどれくらいからたまにという言葉を使っているの？わかんない。からノリで使うの！そうそう、今回はねいつも通りの日常の大切さを描いたんだ。日常は大事LOVE & a m p; H E A R Tという気持ちで今日もR E A D I N G

「なーるほど」

しかし、今振り返ってみると。俺結婚したんだな。正直、最初のころは、しっくりこなかった。しかし今は、昔よりしっくりきている感じであった。

そういえば、昔にもこんなことがあったな。

あれはそう、結婚してから一月ぐらいのころだった。

布団の中に僕と肇がいる。

なぜ、なぜなんだ。なぜこういう状況なんだ？教えてくれエンジェル？

「ふふふ、それはね。結婚しているからさ」

なっ、なぜ俺の心の中を読めるんだ。

「ふふふ、それはね、声に出ているからさ、ベイビー」

「えっ！！まじですか」

「まじですよーちゃん」

「って、何で君がいるの？君の寝るところはそっちのベッドでしよう」

僕はベッドのある方向を指した。

「ふふふ、そうは問屋はよろさねえぜ」

「なぜ、男らしい口調に！？」

「なぜなら、結婚したからさ。」

「それと口調は関係ないでしょう」

「しかし、そんなことは気にしないで続きます。そして夜になりました。寝る前にはお仕事があります。それはなんでしょう。それはせつく・・・」

僕は慌てて肇の口を手で閉ざした。

「お、女の子がふ、ふしだらなことをいってはいけません」

「じゃあ、なんていったらいいの？」

肇が不機嫌そうな顔で言った。

僕は困った、考えるんだ俺。神経細胞すべてニューロン化するんだ。

そうだ、これだ。

「あ、赤ちゃん製造行為、ならいいかな。うん」

「赤ちゃん製造行為？」

「う、うん」

やべ、正直自分で言ってみたが恥ずかしい。なにやってるんだろう。人生22年間生きていたが、これは人生であほなことといった台詞ベスト5に入るくらいだ。

「では赤ちゃん製造行為しますか」

「え、あうん、ってちゃうちゃうちゃうかわないけどちゃうちゃう」

ああ、ちゃうちゃうって犬ちゃうんねん。

自分で自分を突っ込むほど慌てていた。

朝目覚めたら、隣に肇がいた。うれしかった。

昨日までの僕とは違う・・・様な気がした。

心境であろうか？一皮向けたからであろうか？

何でだろう？

僕は肇の顔を見てみた。

すやすやと幸せそうに寝ている。

僕の疑問が一気に吹っ飛んだ。どれくらい吹っ飛んだかということ布団がふっとんだ。というギャグが言えるほど吹っ飛んでいた。

ただ思ったこと、いや思うなんて中途半端なことではなく、誓うというべきか。そう単純にただこの笑顔を一生守っていこうと。ただそれだけだ。

肇に悲しい顔をさせてはならない。絶対に・・・。

僕が誓いをたてている間に肇の体が動き始めた。

「うにゅん？・・・・おはよう、一ちゃん」

体を布団で丸まりながら手だけ上手いことだし髪の毛をかき上げながら起き出した。

「おはよう、肇、今日は何の日かわかるかい？」

「今日でちゆか？わきやりまちえん？」

どうやら、寝ぼけていてろれつがまわっていないようだ。

僕はとりあえず、抱きついた。

すると、肇も抱きつき返してくれて、しかもジャーマンスープレックスまでしてくれた。

「ちゅらー」

「へっ？」

ズドン！

なんていえばいいんだろうか・・・正直に言わせてもらおうとプロレスの技は痛い、めっちゃ痛い。これぞ、まさに天国と地獄！上手いこと言った。

「上手くないよ、一ちゃん」

「あれ、口に出していた？」

「ううん、なんとなくそんな気がしたんですよ、ところで一ちゃんどうして頭にたんこぶあるの？」

どうやら、肇はこの僕にジャーマンスープレックスをしたことすら覚えていないみたいだ。僕は、寛容力があるので許してあげた。

「悪戯な天使が僕にオイタしたんだよ！」

「ううん、なんとなくそんな気がしたんですよ、ところで一ちゃんどうして頭にたんこぶあるの？」

あ、あれ、なんかなかったことにされている？ショック、ショック、ショック。こ、これは試されている。そうだ、そうに違いない。仕方がない、これはいくつきやねー、一ファイト、ファイト、ふあい、ふあい、ふあい、ふあい、ファインセンキュウ。みたいな感じだな。前ふりなげーよ、俺。

「これはですね。たんこぶじゃないんですよ。これは第二の脳です。

」

「ふーん、朝ごはん何がいい」

あれ、なんか寂しい。まあいいよ。

「そうだね、何がいいかな。何があるの」

「和風でしょう、洋風、それでも肇風？」

僕は考えてしまった。いつもなら、パンとかおにぎりとか言っていたのに今日に限って、くそ、たまに、たまにあるんですよ。自分の言った言葉に責任を、ちょっともう少し考えたらよかったよ。バカ、バカ、僕のカバ。じゃなくてバカ。バカはバカなりに考えるんだ。よしいくぞー俺ファイ、ファイ、ファイ、ファイ、フアインセンキユウ！もう、頭がうごかぬー。

「は、肇風で」

しかし、もうすでにそこには肇の姿はなかった。卵焼きのいいにおいがしてきた。

「ちゃん、朝ごはんできたよー」

「……いまいくよー」

僕は思った、たまには、たまにはいいよね。こんな日も。

第6章（前書き）

そう、今回の私が私であるためには、そう、家族が大爆発、裏切り、悲しみ、ハッピーさまざまな出来事が奴らを襲う、君はこの歴史を読むことができる。さあREADING

第6章

そう、その日はいつも通りの帰宅の途中の事だった。

「ほっほっほっ、その男、占ってしんぜよう」

かんだかい女の人の声？だった。そう、帰宅途中に占いやができていた。だが俺はそういうことは全く信じないので無視をし、通り過ぎようとすると思ふと果敢ともいふべきだろうか、いや商売熱心といったほうがいいだろう。俺の前に立ちふさがった。

「・・・・・・どいてくれません」

「今ならなんと100万円で占ってしんぜようぞ」

俺は思った。こいつはあほかと。だが相手を怒らすと何をしでかすか分からないので丁寧になや丁寧に見えぬ。とりあえず前にいるので横からよけて通ろうとしたがまたもたちはばかった。

「・・・・・・」

「今なら半額いやもうタダでいいよお兄さん。占うよ。ねっねっ」

俺は思った、100万から50万そして無料。どこぞの株よりひどい落ち方だ。

だが俺はそんな占いなどに時間をかけていられないのでかわしてとおろうとしたがまたもディフェンスされた。

「・・・・・・」

「他にも豪華特典つけちゃうよ。ええとほら、サイン、私のサインあげるよ。ねだからね。あれだよ、お得だよ。そうお買い得」

こいつ、そこまで占いたいのか俺のこと・・・・俺は即座に脳内会議を開いた。

「どう思います、一社長」

「うーん、なんか情熱がすごいね。専務は」

「そうですね。うざいかな」

「僕もそう思います」

「新人は口出すんじゃない」

「すいません・・・」

「ではここは会長にきめてもらいましょう」

「いいんじゃない」

「おお、会長のお許しがでたぞー。よし占い師に占ってもらおう」

「ではこれにて第1010回、銭湯回終わり」

俺は決めた。

「サインにさ、一ちゃんへと書いてくれよ」

占い師は顔は隠れて表情は見えないが、うれしそうな雰囲気をだし、俺の腕を引っ張り占い部屋に連れてきた。そして占い師は言った。

「帰れ」

俺は心からえーと叫んで

と叫んで

と叫んで

いた。

それは休日の出来事であった。

「ぷぷぷ」

肇は笑っていた。

「どうした肇？何かあった？」

俺は肇が何かをみて笑っていたので見てみると日記であった。

「なんだ日記か？どれどれ何かおもしろい事かいてあるの！」

興味本位で見ってみるとそれは俺、つまり自分の日記であった。

「えっ・・・ねえ、肇さんそれをもってるの？」

冷や汗がだらだらとまるでナイアガラの滝みたく流れていた。

そうだ、よく思い出して見ると、結婚式の時もそうであった。あのときは特に気にしてはいなかったが、いや正直していたが。いったい誰が・・・俺はそれとなく聞いてみた。

「ふふふ、これ？前一の実家にいつてきたときもらったの」

肇はとびっきりの笑顔で答えた。確かにナイススマイルと俺は言いたくなったがそれはそれとして誰にももらったんだ？っていうか俺隠していたのに。

「あの、誰からもらったの？」

「お義父さんから、えーとねこんなふうに」

「あっ、おじゃましてまーす」

私はお義母さんと話していたとき、お義父さんが帰ってきたの。

「おう、肇さんか。元気そうだね。あっそうだ、息子の部屋はもう見た？」

「あっ、はい拝見しました」

「何か発見したかね」

「ええ、カーマストラの本とロリータをベッドの下から発見しました」

「ちょっと、ちょお、え、あれ肇さん？実家にちよくちよくいつてるの？っていうかもしかしてここにあるカーマストラの本って、もしかして僕の・・・？」

「うん、そだよ」

またも冷や汗がマダガスカルみたく流れてきた。

「で続き話すね」

「おっと、肇さんこれは独り言だが私は息子の部屋などに入ったことはないし

、ましてや息子の部屋の秘密など知りもしない。息子の部屋の机の上から二番目の引き出しは実は二段構造で、金庫が入っているなんてことも知らないし、その金庫の鍵のパスワードは10104649なんてことも知らない。そしてその本がこれだということも知らない」

お義父さんはノートを私に渡してくれた。

「お、お義父さん」

「ふっ、いいんだよ。受け取ってくれたまえ」

私は思った、なんて手際のいいお義父さん。あんた最高だよと。

私はお義父さんにむかって親指を立てた。

お義父さんは親指を親指と人差し指にいれた。

その光景を見てお義母さんがお義父さんの頭をぶん殴った。

「ちょ、ちょと・・・・・・まじで」

俺は肇の顔を見て聞いた。

「まじですよ、旦那様」

肇は答えた。

俺は思い出したそういえば前の夜に父さんからメールが届いたことを、内容は（父は勇敢であった、勇敢であったんだ、そしてバカだった。うおんちゅ！）

・・・なるほどね。大丈夫だよ、父さんあんた本当にバカだよ。なんだろう、涙が止まらないな。そのとき肇が優しく肩をたたきこ
ういった。

「うおんちゅ」

第7章（前書き）

あいつは俺で、俺があいつつか、そう、人生は勉強である。つねに勉強、そして仕事。まあそれはどうでもいいがよくない。まあそれはおいといて、肇と一の素敵な生活が描かれているラブラブな第7章、読めば読むほど楽しくなるよREADING&READING

G

第7章

違うだろ、そうじゃない……そうじゃないんだ。

俺は一人で葛藤していた。

なんだ。

なんだ。

なんだ。

オープンマインド、そう、オープンマインドで考えるんだ。

そうだ、あれだなんていったらいいんだ、ヨガ？だーえと手が伸びーる、火を噴きます。子供いますって、まあいい、それはおいしいて。

そう、サプライズ、驚き、アメージングってか、なんかうーんビツクリで感動？って見た感じで、ああもうとにかく、すごいことがしたいとMEは考えていた。

なんてか、去年も、一昨年も肇が俺のために色々してくれた、それも悪くはないが、今回は俺がなんとかしたいと思っているんですよ。俺っつていうか、俺の脳細胞達よ、いいアイデアを生むんだ。あれかサプリか？マグロ食べたらでるのか答えてくれ、MYブレイン。って自分だから答えてくれるはずないか。

俺はふと天井を眺めていた。

「答えましょう」

そう突然の声に俺は驚いていた。次に回りをみたが誰もいなかった。だが声はしていた。

「答えましょう」

こ、これはまさかー、俺の隠れた能力が、目覚めたっていうか起きちゃった。

確かに才能はあると思っていた、遅すぎたぐらいだ。せめて入試や、面接、司会者をしていたころ目覚めてくれていたらなあ。上がらな

かったのにねのねね。

「では先ほどの質問の答えを答えましょうか？」

「では頼む」

「最後にアンサー？」

「何いってんだおまえ？ あほか」

何が最後にアンサー？ おもしろくねーよ。っていうかわかってねー。

「そうじゃねーだろ、なんていうか、もっとスムーズかつスマートな言い回しはできないのかい？」

「……じゃ、こたえねー」

「……それは困る。小丸も困る」

「いや、おまえ小丸じゃねーだろ」

「いや、小丸かもよ？」

「……帰るわ。じゃあ、じゃあじゃあ」

声のボリュームがだんだんと下がっていった。

「ちょっと、ごめんなさい。最後にアンサー。これいいねすつばらしいフレーム、今年の流行語大賞とるね」

「そう、そんなにいい？」

「いや全然」

「……」

おっとしまったつい本音がでてしまった。やばい奴は次にこういうだろう。帰るわ、ってそれはまずい、答えをまず教えてもらわないと。

「……かえ」

「なんちゃて、なんちゃって、メキシコジョークさ。さあもう一度いっとくれあの言葉を」

「……かえ」

「ちやう、ちやう、ちやうでほんまにもう、あれですよ最後に……ってやつお願いしますよ。」

「ちいっ！！仕方がないな。今回だけだぞ」

「ほんますいません」

くそ、調子にのりや勝手、これでしようもないアイディアだったらゆるさねーからな、なにが最後にアンサー？だ。ばっかじゃねーの、それだったら、ファイナルこたえ？のほうがよくねー。ってこれよくねー？ファイナルこたえ？やべっこれは流行語大賞ねらえるべ。っていうか俺天才。おおっと、これも重要だが、今回はおいといて、謎の声？の知恵を借りないと。

「じゃあ、いっちゃうよ」

その瞬間俺は息を飲み込んだ、そして不覚にもどきどき、わくわくしていた。

いったいどんなすばらしい考えが聞けるかを。

「旅行行けば」

ちよっとお母さんに買い物行ってきてみたいな風に言われた。だがしかし、それはいいアイデアであった。

「いいねそれ。最高だよ。MYブレイン」

「じゃあ、俺は疲れたから寝るよ。最後にあんさーこれ今年の流行語大賞だね」

「ありがとう」

それは無理だろ。と俺は思った。

それから、俺は肇と旅行に行くことを決めた。

そう、近づいてきている。何に？それはね、フランス旅行にさ！！年末に肇と僕で外国に旅立つことが決定したね。そう、もう誰にも止められない、例え神様でも・・・ごめん、少し言い過ぎたよ。そう、これは独り言だよ、いいじゃないか。たまには、ふつまあい、フランスに行くのだから、少しフランス語の勉強をね肇に教えてもらうのさ。肇はあの年で全世界の言葉を話せるからね。負けてられないな。まあいい、おっとこれ口癖！！また知らない自分を発見してしまったよ。

こんこん

おっとどうやら肇が来たらしいね。さあてやるか。

僕は自分にエールを送って気合いをいれた。

「入るよ」

「OK、BABY、お前の心にホールインワンを決めるぜ!!」

「では、教科書の3ページを開いて」

肇は素であつた。

あつれー？肇さんが乗ってこないね。いつもだったら、ふおーーとか言いそうなのに。うん、よくみれば、だてメガネにびしっとした服装に長い棒、やばいこいつはやる気まんまんって感じだな。

「あの、肇」

「・・・・・・・・・・」

応答がない。

「もしもーし、肇さん？」

「・・・・・・・・・・」

まるで屍のようだ。

「・・・・・・・・せんせい？」

「ウイ、なんです？一君」

肇が返事をした。

「い、いえ、三ページですね」

僕は教科書を開いた。そこにはフランス語の数字がずらっとならんでいた。

「では、私の後に復唱してください。」

「はい」

肇は首を振った。

「いいえ、そういうときはウイ、わからないときはノン。でははじめます」

「ウイ」

僕は首を縦に振った。

「アン」

「安」

「ドウ」

「藤」

「トロア」

「とは？」

なにやら重たい空気が流れていた。

「アン、ドウ、トロア」

「安、藤、とは？」

僕は思った。なるほど、フランス語の1・2・3は安藤とは？なんだ。すると肇いや先生が拍手をしながら立った。

「完璧です。先生もう教えることはありません」

肇が言った。

「まじですか？先生、これだけで安藤とは？だけで完璧なんですか」

「ええ、これでリズムがとれます。アン、ドウ、トロア、アン、ドウ、トロアってね」

「では、これでフランスで生きていきますね。安藤とは？で」

「いや、無理」

肇は素で答えた。僕は素でへこんだ。

さてフランス旅行まであと2週間。運命はいかに」

「あと、5時間で飛行機に乗るんだ。準備は言いかい・・・俺」

そう、一人でハイテンションになっていた。しかし、部屋のドアからビデオカメラを持った肇がいた。

「・・・肇、何してるの？あと、手がGOODって形になってるよ！」

肇は笑顔で答えた。

「おもしろかったので合格だよ。これTVにおくったら受けるよ。絶対人気者だよ。D，GOOD！！」

「は、肇D，GOODって何」

「えー、D，GOODって知らないの！これだよ。これ」

僕は肇の手の形を見た両方の手で親指を立てていた。

「Double GOODの略だよ。あとVD、GOODってのもあるんだよ。こうするの」

親指を立てながら同時に45度ずつ内側にゆっくり引っ付きVの軌道を描いていった。

「……で、なん」

で、なんなのそれと言おうとした瞬間、肇がものすごくしよげた顔をしようになったのでTPOの判断で褒めた。

「い、いいねー。D、GOOD。た、確かこうするんだよね。これ流行るよ。流行語大賞決定だよ。あとVD、GOODすばらしい。こう斜めにするんだよね。最高ー」

すると、肇の顔が最高に輝かしい笑顔になった。

「そ、そうかなあ。やっぱりそう思う。だよね。だよねー。るんるん!!」

「と、ところで、もう準備は完璧かい、肇」

「うん、大丈夫だよ。荷物も完璧だよ。そっちはどう」

「ああ、もちろん愚問だな肇君、このトラベラーに忘れ物などない」

「じゃあ、パスポートはある」

「ああ、あるよ。無くさないようにあそこの金庫に入れてあるよ。完璧だろ」

「……」

肇はぽけーっと言う顔で僕を見つめていた。

「あっ!!」

僕はとっさにパスポートは持って行かないと意味がないことに気づいた。そして即座に金庫からパスポートを取り出した。

「ははは、ではそろそろ行こうか肇」

「……一ちゃん、まだ4時間25分あるよ。ここから空港まで20分だからまだまだはやすぎるよ」

そ、そうだった、俺としたことが時間の管理ができていないとは、ショックだ。一ショック、ショック、ショックキング。だが、このま

ま引き下がるのも男としてプライドが許されん、こういうときこそ
TPOで考えるんだ。

「肇、お茶でも飲もうか」

「そうだね、すぐ準備するよ」

肇は台所に向かった。

そして俺は思った。引き下がってもいいじゃないか。TPO、TP
O。あーそうです、良い考えが浮かばなかっただけですよ。

「お茶いれたよ。こっちに来て飲もう」

「うん、ありがとう今行くよ」

俺は出発の時間までお茶を飲んでいた。

第8章 (前書き)

さあ、始めました。一と肇のラブロマンス今日も楽しいロボットダンス！いえーい

第8章

ピーピーピ

そうここは飛行機を乗るため通らないといけないゲートである。

「一ちゃん引つかかったね」

肇は笑いながらこちらを見ていた。

「くっ」

恥ずかしい、別に悪いことはやっていないけど、恥ずかしいし、何か悪いことをした気持ちになるのは俺だけかな。心臓がドクン、ドクンしてやがる。別に悪いことしてないのにな。ベルトかな。そうだ。俺はベルトを外しもう一度ゲートに通ろうとした。

ピーピーピ

「え、まじ」

「一ちゃん、まさかロボットだったの」

「違うわい」

俺は考えた。分からんぞ。

「すいません、こちらの特別室に来てもらえますか？」
係員が一を呼んだ。

「はい、ちよつと肇行ってくるな」

「OK、とりあえず、暇だからロボットダンスでもしといていい？」
肇はすぐにでもロボットダンスを踊る雰囲気を出していた。

「だめ、おとなしく待ってて。」

「早くね」

「分かったよ」

そして一は特別室に入った。

そこには、女性の係員と椅子と机が置いてあった。

「すいません、係の人にこちらにと言われたんですが……」

「貴様、ロボット兵か？」

突然係員から、はっせられた言葉に俺は戸惑っていた。

「……………」

ここにも変な奴がいると。

「違います。あの連れ待ってますんで、早くしてくれませんか？」

「貴様、ゲートでピピピとなったんだろ」

女性係員は言った。

「はい、しかし僕はどこから見ても人間です」

一はめんどくさそうな顔をして話した。

「仕方ない。今から検査を開始する。裸になれ」

女性係員は命令した。

「はあ、裸にならなくても、せめてTシャツとパンツ姿でいいでしょう。」

「だめだ、貴様犯罪者か」

女性係員は厳しい目でこちらを見た。

「違いますよ。」

「じゃあ、裸になれるだろう」

「本気で言っているですか？」

「当たり前だ、貴様がもし、パンツの中に危険物を隠していたらどうする。この飛行場はパニックになる。それにけが人や死人が出た場合どうしてくれる。貴様に責任が取れるのか、無理だろ。だから裸になれ」

女性係員はもっともらしいことを言っていて、一は反論ができなかった。

「なるほどな、分かった脱がなくていいよ。とりあえず、警察にいかがか」

係員の女性が一の手を掴み部屋を出ようとした。

「ま、待て。分かった、分かったよ。」

「そうか、分かった。えと、貴様誰だ？」

「一だ。一だけに初めまして女性係員さん。あなたの名前は」

「……神埼 かんざき 卑弥呼 ひみこ だ。早く脱げよ」

つまらん男だと卑弥呼は思っていた。

一は脱ぎだした。上着を脱ぎ、Tシャツを脱ぎ、靴下を脱ぎ、ズボンを脱いで、そしてパンツも脱いだ。

「こ、これでいいのか」

一は大事なところに手を置いて話した。それと同時に思っていた。飛行機乗るのってこれほど辛いことだったのかと。

「手をどかせ、手を」

卑弥呼は言った。

「いや、まじ勘弁してくださいよ。もういいでしょう、何も持っていないでしょ」

「だったら、手をどかせ、その手の中に凶器を隠している場合があるからな」

「いや、凶器って、違いますよ」

「だったら、手をどかせ。どかさないと警察に連れていく。5秒以内だ、5、4・・・」

「分かりましたよ。ほらこれでいいでしょう」

一は手をどかした。

すると、卑弥呼は一の手で隠していた部分をまじまじ見ていた。

「なんだ、貴様女だったのか。よし何もない、通っていいぞ。」

卑弥呼は安心した様子で一を見送った。

「・・・・・・・・・・」

一は心の臓が短剣でぐさっと刺された気持ちになった。

「やっと来たよ。一ちゃんどうだった。」

肇はまちにまっていた感じの顔をしていた。

「・・・・・・・・え、OKだったよ。ごめんね、またせて」

「OKだったらいいよ。そうそう、一ちゃんさっきね。私の友達がここで働いているんだって、そして今仕事終わったから、私達を見送ってくれるんだって。一ちゃん、いいよね」

「ああ、別にいいよ」

切り替え、切り替え。よし、さっきの事は、忘れた。よしOk。

一は自分に言い聞かせた。

「で、肇、その友達ってどんな人だい」

「えとね、名前は、あ、あれだよ。おい、こっち、こっち卑弥呼」
「えっ！」

一はまさかと思っていた。いや思いたくなかった。

「あっ、肇、久しぶり。あっ」

そう、肇の友達というのは、先ほど、一を調べた。神埼 卑弥呼であつた。

一の飛行機を乗るまでの時間が十年ぐらいの長さに感じていた。

第9章（前書き）

旅行っていえば、温泉かな、しかし海もいい、山もいい、電車もいいが飛行機は耳が痛い。さあ、READING

第9章

「飛行機ですか？ 実は俺飛行機乗ったことないんだ。肇は心境をつげた一であった。」

「あるよ。卑ーちゃんは」

「仕事上ね。よく乗るね」

「・・・肇さん、なんで神埼さんはいるんですか」

「おかしいよね、おかしくない、さっき別れたよね。僕らが飛行機するとき。」

「卑弥呼でいいよ、一」

「はあー。では、あの聞きづらいけどなんでいるの？」

「何、居たら悪いの、私は飛行機に乗ったらだめなの、え」

卑弥呼の目がするどくなっていた。

「・・・え、いや、そんなことは、えと肇さん。どういことですか？」

「ふふふ、それはね、一ちゃん」

肇が答えた。

「それは」

「ふふふ、それはね。ということさ」

「いや、ということさと言われても」

「分かりませんか？」

「分かりません」

「仕方ないよ、肇、男は皆馬鹿なのよ。いや女だったか？」

卑弥呼の言葉にカチンときたが、我慢をし耐えた。男だから。

「えっ、一ちゃん女だったの。あわわわー、わ、私百合だったの。」

「違うよ、真に受けるな。肇、あと百合とか言わないで」

「ふん、間違われたくなかったら大事なところにキュウリでも入れとけよ」

卑弥呼は一の肩をぽんぽん叩きながら言った。

「うるせーよ、ていうか、おまえなんだよ、なんでいるの」
とうとう一は聞いた。

「教えてほしいか」

卑弥呼は腕を組みながら話していた。

「教えてくれ」

「教えてほしいのか」

「教えてくれ」

「貴様に教える権利はねえ」

開いた口が閉じなかった一であった。一は仕方なく、男として使いたくなかったが、肇の方の顔を見て。助けてのオーラを出した。それに気づいた肇は答えた。

「仕方ないな、一ちゃん。卑ーちゃんはねガイドさんなんだよ」

「そうだ。敬えよ、フランス語はまかしてもらおう、アニヨハセヨ」

「えー！ー！ー！。今韓国語言ったよ。肇大丈夫この人」

「心配するなよ。おまえ本当女みたいな奴だな。シェイシェイ」

「ほら、肇聞いただろ、中国語だよ。この人無理だって」

「大丈夫だって、だって卑ーちゃんは、お母さんがフランス人だからね」

一は恐る恐る、卑弥呼の顔を見てみた。そして指を指して肇を見た。

「こ。これが」

肇がうなづいた瞬間、一の頭に衝撃が落ちた。稲の妻の稲妻のように。

「あ、痛」

「指を指すな、指を」

卑弥呼のするどい突っ込みであった。

一は頭をさすりながら思った。

「どーなるんだろうと」

そして一行はフランスに着いた。

第10章 その後（前書き）

さて、最終回です。READING

第10章 その後

僕の人生を振り返ってみると色々な事があったなあ。充実した人生になれたのは肇との出会いがあったからだな。

フランス旅行も楽しかった。本当に・・・昔の出来事を思い出しながら肇にお礼がしたいと願っていた。そこであることを思いついた。

「これは肇に送る僕からのメッセージだ。これから君に伝えたい言葉である。まあ、メッセージと言葉って英語を和訳しただけだからね。まあそれはおいといて、僕は面と向かって君に感情表現を出すのが苦手なんだ、だから、DVDレターで伝えようかと。けど、君が聞きたくないなら、聞かなくていい。DVDを捨てるなり。壊すなりしてくれ。ただ、ダビングはしないでね。」

僕はカメラ目線をしながら話し続けた。

「・・・・・・・・まあいい。正直君と出会ったこの5年間で、色々なことがあった。まずは君と出会ったことだ。君との出会いは、なんというかな。まさに衝撃的な、そうまるで雷に撃たれたような出来事であった。君と出会えた運命をいやデステイニー、いや和訳しただけだね。本当に感謝している。僕は照れ屋だからさ。それまで人生を適当に生きていたと思う。というか君と出会えなかったら、今も人生を適当に生きていたかもしれない。本当に感謝している。言葉だけでは伝わらない、いや伝えきれない。だが、とりあえずは、君に言葉を伝えたい。ありがとう」

僕は顔を真っ赤にしていた。

「・・・・照れくさいな、なんかさ。ただこれからも君と死ぬまで一緒にいたい。ありがとう。そして愛している」

「CUT、OKよかったよ。一ちゃん。私泣いちゃったよ。」

「・・・ははは」

そう、実はこのDVDレターの撮影者はそう、肇である。

「これは私の一生の宝物だよ。ねえー壺」

一は壺を抱きながら、感激していた。

「壺も大きくなったね」

「うん、もうじき二歳と半年だね」

「そうか・・・もうそんなになるんだね」

肇は壺を一にそーっと手渡した。

「・・・うん。どうした？」

肇は新しくDVDテープを入れ、録画のボタンを押して話し始めた。

「実は、重大発表があります。もうじき壺がお兄さんになります」

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8011h/>

私が私であるために

2010年11月16日18時46分発行